

世紀前半を立花城に住んで立花氏と称したと『田原系図』に見える。このころの城主立花鑑載は、立花氏が断絶したので、一族の中から迎えられたといわれる。

立花鑑載の変心

立花鑑載が高橋鑑種の強引な調略によって、毛利氏に内通しているという風説を聞いて、大友宗麟は豊後から家老の戸次鑑連・吉弘鑑理を送って、立花城を占領し、怒留湯主殿助を立花西城督として、鑑載の動きを監視させた。

永禄十一年六月、立花鑑載は城督の抛る立花西岳を攻撃してこれを奪い、糸島の武将原田親種と共に籠城した。大友氏はただちに立花城を包囲攻撃し、宗像方面へ落ち行く立花鑑載を見つけて襲いかかり斬首した。

それから三か月後、中国勢が立花城を包囲し、それを豊後の救援軍が後ろ巻きしたのである。しかし、十重二十重の毛利方包囲網の前に、大友方は多々良川さえ渡ることができず、城内の大友方は孤立したまま、時日を過ごした。毛利方は、出雲白鹿城攻めに使った金掘り工を石見大森銀山などから連れてきて、地中を掘って立花城の城砦に迫り、水手を切り、城柵を掘り崩して本陣へ迫った。城中は水が枯渇して先ゆきが見え、毛利方からでも「見せかけ」(『赤川文書』四月二十日)とわかる動きが多くなってきたので、落城も程近いと観測していたところ、高良山まで出陣していた大友宗麟も、立花城の放棄を許した。永禄十二年閏五月三日、田北民部丞鑑益、田北刑部丞鎮周・鶴原掃部・臼杵進上允・立花弥七郎は降伏した。毛利方は彼らを丁重に志賀島の大友陣中に夫丸・雑具と共に送り届けた(『赤川文書』)。

立花城が毛利方の手に落ちて、大友方の後ろ巻きは続けられたま

ま、両者とも、戦局の転換を模索して、後方攪乱を狙うようになる。

六 大内輝弘の挙兵



大内輝弘の花押

切ろうとした(『別津文書』永禄十年閏五月二十一日)。

大友方は、永禄八年(二五六五)六月、屋代島(周防大島)で挙兵して失敗し豊後へ逃れてきた大内輝弘を防長へ侵入させようとした。輝弘の父高弘は大内義興の弟水上山興隆寺別当尊光で家督の座を狙って失敗し、豊後へ亡命して還俗していた。

輝弘は豊前の恵良・吉村・屋方・緒方等の新興領主層を被官として、知行地の約束手形を乱発しながら、渡海の準備を進めた。大友宗麟は、豊後水軍の薬師寺鎮興らに予め防長沿岸を抄掠させ、ついで、大内輝弘軍の警固船大将に任じた。

永禄十二年十月十一日、大内輝弘は兵五〇〇余(一説三〇〇〇)と共に、周防秋穂浦(小郡町)に上陸し、翌十二日に山口に侵入して放火した。十三日、高嶺城攻略に取り懸かったが反撃されて、川向かいの築山に桶籠った。防長には、かねて大友方の調略が行われていたらしく、各地で一揆が蜂起し、油断できない形勢となった(『船越』)。

尼子勝久の挙兵

このとき、北口では、京都で隠遁生活を送っていた尼子勝久が山中鹿之助に擁せられて、毛利方の天野隆重が城番を勤めていた富田月山城を包囲し、さらに石見国へも侵入する勢いを示した。また瀬戸内海では、村上水軍の首領村上武吉が毛利氏から離反し、上口でも備後神辺に藤井一党が挙兵、備中の浦上宗景も大友宗麟の要請に動いた(『勝田田』)。

毛利勢の立花敗軍

この情勢の急変に驚愕した毛利元就は、下関の陣営から全軍の撤収を命じた。

山口の築山に籠城した大内輝弘は、対岸高嶺の敵陣に参加する者が続々と集まってくるのを見て、これを阻止するため防禦陣を敷いた。その軍将の一人城井小次郎は宮野口において吉見一族上領頼規父子の二団と戦い敗北したが、上領方も嫡子頼武・伊藤実信ら多数が戦死した(『赤木』)。しかし、敵方は大勢となり、味方は減少する形勢となつて、輝弘は山口から撤退することにし、秋穂の海岸を目指した。海上の豊後水軍は撤去して、詮方なく、徳山方向へ移動してみたが、渡海の術なく富海の茶臼山に登つて、味方の船の迎えを待つことにした。

毛利方は大軍をもってこの山を包囲し、一気に攻略した。敗れた輝弘は十月二十五日、挙兵してわずか二週間で自刃した。小早川隆景は「豊州より渡海の人数一人も洩らさず討ち果たした」と報じている(『野村』)。

高橋鑑種の

小倉移封

立花城の毛利方数方の撤退を見て、大友方の追撃は遠花城に残った乃美兵部丞・坂新五左衛門尉ら一〇〇〇余の兵はしばらくして降伏した。今度は大友方が彼らを湊まで送り届けた。宝満城にも二〇〇〇ばかりの加勢を送り込んでいたが、筑前の諸將の仲介によって、

高橋鑑種が下城し、豊前に企救・田川二郡を与えられ、小倉城に住んだという(『大友興隆記』、「企救」郡説もある)。

これより三か月ほど前、毛利氏は次の誓約書を書いている。

今度、大友と確執の儀につきて、上意に従い和睦を致すべきの由、仰せ出さるにより、御方に対し、此方存分の事、条々をもって申さしめ候、

一、此の如く、和平を致し候といえども、貴所に対し申し、末代において見放し申すまじき事

一、万一、向後、大友と深甚の知音の儀候といえども、(高橋)鑑種御事、彼下へ御入候へと申すべからず候、此方与力として、盡未来の際を限り、抱え置き申すべき事、

付、御方此方半、自然雑説も候へん時は、この神文をもって、直に尋ねに預かるべき事、

一、所帯の儀、書立てをもつて申し合わせ候仕、聊も相違あるべからざる事
右の条々、偽るにおいては、梵天帝釈・四大天王(中略)の御罰を罷り蒙る者也、仍つて起請文、件の如し

永祿十二年八月五日 右馬頭元就

小早川隆景

吉川元春

毛利輝元

高橋(鑑種)三河守殿

(原漢文)

こうした起請文を毛利氏は多く発しており、特別珍しいものではないが、老獪な元就の神文がどの程度信用できるものか疑わしい限りであるとはいえ、高橋鑑種が小倉に移住させられた事実は、この神文と関係が深い。毛利方が撤兵したあと、松山城も放棄されたが、門司城には依然として城番が置かれて企救郡を支配していた。したがって、大友方に降つた高橋鑑種を小倉に置くということは、小倉を両家の緩衝地帯とす

る合意が成立したことにほかならない。このあと、高橋鑑種は、大友氏から段銭の徴収を命ぜられている一方で、長門の内藤隆春と親しく情報交換をしており、毛利方として行動した。

なお、高橋鑑種の家臣北原・中野某は、大友宗麟に懇願して筑前に高橋家の再興を許され、立花城督吉弘鑑理の二男弥七郎を養子として、高橋鎮種（のち紹運）と称させ岩屋城・宝満城に入った。吉弘鑑理が間もなく老死すると、大友家の老忠臣戸次鑑連が立花城督を命ぜられ、立花道雪と称した。

そのころ、毛利氏は、鳥取・岡山方面の経略に意を注ぎ、織田信長と対立するようになっていたから、九州は比較的平穏で、叛服を繰り返しながら成長してきた肥前の龍造寺隆信の討伐に出兵する程度の動きで、大友宗麟の北部九州支配が約一〇年間つづいた。

七 大友氏の衰退と蓑島の戦い

大友氏の全盛の転機となったのが、天正六年（一五七八）十月の日向高城での大敗である。日向において伊東義祐と土持親成の対立に介入した大友氏は、土持氏を支援する島津氏の大軍と衝突することになり、不用意な作戦が裏目に出て大敗を喫し、多くの家臣を失ってしまった。

秋月種実の発展

大友家重臣多数の戦死と、宗麟のキリスト教信仰に批判的な重臣たちの非協力で、大友家が弱体化したとみてとった豊筑の国人たちは、またもや毛利氏や龍造寺氏と連絡を取り合って、大友氏の支配から独立しようという動きを始める。その筆頭が筑前の秋月種実であり、これと連携して動くのが、筑紫・宗像・



秋月種実の花押

麻生・長野・小倉高橋・野仲鎮兼・時枝鎮継らである。これより前、毛利輝元は柳沢元政へ「去年、あなたの薩州へ下向の首尾によって、豊薩の対立が戦争に発展することになった。豊筑の毛利方の武士との関係もあるのです、薩州の動きに合わせて毛利氏も九州へ軍勢を動かすつもりである」（『柳沢』）と述べており、織田信長も大友宗麟、毛利輝元、島津義久の連合が形成される中で、豊筑の武士で毛利、島津に心を寄せながら日向に出陣させられた武士が多かったことも、敗軍につながったであろうと思われる。

永禄十二年（一五六九）閏五月、筑前立花城が毛利氏に占領され、高橋鑑種の籠城する宝満城へ、中国衆二〇〇〇人の増援軍が送り込まれたころ、豊前では、企救・田川・京都・仲津の西部四郡が毛利氏の支配下に入ったが、同年十月の立花城撤兵で、毛利氏は松山城をも放棄し、門司城と企救郡を維持するのみとなり、やがて小倉に高橋鑑種入道宗仙を住まわせた。

大友氏と宇佐宮の対立 宇佐郡では、大友氏の社奉行奈多鑑基・鎮基父子（国東郡安芸郷奈多八幡社司で、宗麟の正室の宇佐一族）と宇

佐大宮司ほかの社官衆との対立が深刻となり、宇佐宮の宮成・益永・時枝・橋津氏は毛利氏や秋月氏と連絡をとって大友氏に敵対するようになる。

隣の下毛郡では、二〇余年前から叛服常でない野仲鎮兼が旧領回復を図って、山国郷より平野部に出てきて、田原紹忍（親賢）指揮下にある大畑城（中津市加来）・福島城・田島崎城（三光村成恒）を包囲し、数十